

介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学びについて (老年看護実習で困難感を表出した学生の学び)

Student's Learning of Gerontological Nursing in a Geriatric Health Services Facility
(Student's Learning in Difficulty of Gerontological Nursing)

石垣 範子 深江 久代

ISHIGAKI Noriko

FUKAE Hisayo

I. はじめに

研究者は本研究をはじめ以前、『介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について』¹⁾を研究テーマとして質的統合法(KJ法)による研究を行っている。この研究を始めるきっかけとなったのは、老年看護実習において認知症高齢者を受け持った学生が対象者とのかわりにおいて恐怖感や拒絶された感じを抱き、対象者との関係性をどのように築いていけばよいのかわからないという事例があったからであった。そこで、実際に介護老人保健施設での学生の実習体験についてFocus Group Interview(以下「FGI」とする。)を通じて語ってもらい、学生の抱く困難感として以下の6つの困難感を捉えることができた。老年看護実習での学生は、【高齢者を理解してよりよい療養生活を支える援助の難しさ】を実習上の課題の中心的要素として持ち、【実習初期における高齢者からの情報の引き出しや同意を得ることの困難さ】を抱きつつ、【認知症にともなう行動や発言、症状出現時の対応方法への戸惑い】や、【拒否や否定をされたり、叩くなどの攻撃を受けることによる驚きと戸惑い】を感じながら、援助者である学生として【高齢者に対し必要な援助を推し進めて実施することの難しさ】や、【施設職員の認知症高齢者を尊重した態度と統一した対応ができないことに対する戸惑い】を抱いていた。そのため実習過程においては、これらの困難感が相互に影響を及ぼしあいながら困難感を増幅させ、複雑化させるような状況を引き起こしていることが明らかになった。そして、この研究から学生が実習で抱く困難感の解決や高齢者看護の理解を深めるための働きかけが必要であることなどの示唆が得られた。この研究過程において、学生の困難感の語りの中に実習体験を通じて得られた学生の学びが潜んでいることを感じ、その学びも同時に明らかにしたいと考え、本研究に着手することとした。

老年看護実習における看護学生の学びに関する先行研究は、1990年の看護師養成教育のカリキュラム改正による「老年看護学」が「成人看護学」より専門教科として独立した以後も盛んに行なわれている。杉野²⁾らは、“老年者の立場に立ったケアとは”といった視点から介護老人保健施設、グループホームで実習を行った学生の実習レポートをもとに学生の学びの分析を行い、【その人らしさを理解する】、【自立を目指した関わり】、【老年者を尊重する】、【ケアをするために必要な基礎知識を持つ】ことの理解が得られたと述べている。また、介護老人保健施設での高齢者を対象とした看護過程を展開する実習を行った千葉³⁾らは、学生の実習記録を分析対象とし、【高齢者の特徴の理解】、【高齢者看護の実践】、【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】、【施設ケアの特

徴の理解】、【高齢者ケア施設における看護の役割理解】など老年看護に必要と思われる多様な要素についての学びを報告している。これらの先行研究における学生の学びに関する特徴や傾向は、各々の学校の授業内容や実習目標、実習場の選択（実習環境）、実習指導体制などによる影響を受けて異なることが考えられる。学生の学びのデータ抽出方法については、学生の実習記録や実習レポートの内容から収集し、質的に分析したものが多く見られるが、FGIの手法を用いて自己の実習体験を振り返らせ、学生の語りの中にある学生自身の学びと思われるデータを読み取り質的に分析したものは見当たらない。

そこで、本研究では介護老人保健施設での老年看護実習において困難感を表出した学生の実習における学びについてFGIを通して明らかにすることとする。

II. 研究目的

介護老人保健施設での老年看護実習において困難感を表出した学生の学びがどのようなものであったのかについて明らかにし、学生の学びから老年看護の授業や実習指導のあり方を検討する。

III. 本研究での用語の定義

学生の学び：研究対象者である学生が介護老人保健施設での実習体験を通して理解したことや気づき。

Focus Group Interview：共通の経験を持つ少数の人々から構成され、グループ（小集団）という状況の働きによって刺激され、個々の考えや感情が引き出され、グループメンバーが考えと感情を共有することができるグループディスカッションの技法。

IV. 研究方法

1. 研究対象者

平成23年5月から11月に老年看護実習を行い、単位認定を受けたS大学短期大学部看護学科の3年生で、研究協力の説明を受けて同意書による承認が得られた学生。

2. 実習状況及びデータの収集方法

S大学短期大学部看護学科の老年看護実習は、介護老人保健施設で8日間、回復期リハビリテーション病院で2日、デイサービス事業所で1日、介護老人福祉施設で1日、学内実習で2日の合わせて3週間で3単位の実習を行っている。そこで、本研究では特に介護老人保健施設での実習体験にもとづく困難感と学びについてFGIを行った。

同意書に基づく研究協力が得られた学生を1グループあたり5～6人の構成とし、1回1時間程度のFGIを実施した。FGIの司会者は、上記の老年看護実習で実習指導を直接行った教員以外の者を担当とし、FGIの内容はすべて録音した。

3. 分析方法

FGIで録音した内容をすべて逐語記録に起こし、学生の学びと思われる文節を取り上げ、質的統合法（KJ法）を用いて分析を行った。分析段階では、学生が語った内容の理解の不足と偏りを防ぐために、質的統合法（KJ法）の研究経験をもつ指導者によるスーパービジョンを受けて妥当性の確保に努めるようにした。

実際の分析段階においては、学生のインタビュー記録の内容を繰り返し熟読し、1つの意味にしかとれないようにラベルの作成を行った。ラベルのグループ編成においては、ラベルを1枚ずつ広げ、全体のラベルに目を通してから、意味が類似しているものを2～4枚ずつまとめてグループ化した。そして、グループ化を行ったラベル全体の意味を示すように一文にまとめ、表札作りをした。左記のプロセスを繰り返し、最終のラベルが6枚になるまで行い、最終段階のラベル同志の相互関係をみるために空間配置を行い、最終ラベル毎にその内容を端的に表す象徴的な表現となるシンボルマークを設けた。さらに最終ラベル同志を見直し、その学びの意味を再考して学生の学びの状況間の構造化と意味づけを試みた。

4. 倫理的配慮

本研究は、静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認を得てから実施を行っている。また研究対象である学生に対する説明は、老年看護実習の評価判定終了後に行っている。

研究対象である学生への説明内容は、研究目的、研究方法、研究内容などについて口頭および文書で行った。研究の参加は学生の自由意志によるものであり、参加しないことによる不利益は一切なく、FGIの途中でも辞退ができること、成績には一切関係しないこと、個人を特定しないこと、研究目的以外には研究データを使用しないことなどを明示した。説明後、同意書による学生本人のサインをもって研究参加の同意が得られたとした。

さらにFGIでは、実習指導担当の教員以外の者が司会を行い、教育と研究の分離性に努めた。研究参加の学生に対しては、実習施設で受け持った療養者が特定されることのないように情報提供に関する注意を徹底させ、研究で得られたデータの匿名性と守秘性を保証するために記号化して厳重に保管し、研究終了後もデータの漏洩がないように配慮した。

V. 研究結果

1. FGIの実施状況

研究説明を行い、研究協力の同意が得られた学生は前期に実習が終了した23名であった。そこで、23人の学生を1グループあたり5～6人の4グループに分け、1グループ1回1時間以内を目安として、平成23年8月にFGIを実施した。

2. 分析データの作成

FGIの録音内容を忠実に逐語録に起こし、学生の学びとその状況に関連していると思われる発言内容を広く取り出した。データ化したラベルの全総数は、34枚であった。グループ化のプロセスは3段階目で最終ラベルが6枚になり、その時点でグループ編成を終了とした。最終ラベルの6枚には、それぞれのラベルの意味を端的に表すシンボルマークをつけた。

(学生の学びのグループ編成例を以下に記述する。なお、【 】はシンボルマーク、< >は最終ラベル、「 」は素データ(元ラベル)を示している。)

3. 学生の学び

1) 【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】

上記のシンボルマークを導き出した素データは、以下である。

「(001) 同じことを毎日、次の日も次の日も同じことを家に帰りたいことはできないと説明し

でも一日の中で何回も言ったり、いろんな理由で声かけをするが、認知症があつて理解してもらえなくて、(中略) だんだん自分(学生)の言葉が無くなって行って、むずかしいことをどうやって何とか理解してもらう、認知症があるけれど、でもしっかりしているところもあつて、その境目、その人がどこまでわかっているのかわからないことがあつて、その人の理解度をわかるのがむずかしかった。」「(018) 失語症で、結構ジェスチャー的に伝えるんですけども、(中略) たぶん脳梗塞の後遺症で、損傷している部分があつて、きっと指す所を間違えちゃうところもあるのかなというのを、最後の方だったんですけども知りました。(中略) たぶん、脳梗塞の後遺症でそういうことがあつて、その人をどこまで自分で把握できたのかというか、しきれなかった部分が多かったのかなというふうに思いました。」「(013) 困ったというと、短期記憶の障害があるということで、さっきやったことを覚えていない、昨日のことを覚えていない。学生が毎日伺いますので、だいたい顔は覚えてもらえるし、この人がこう言ったことはわかるのですけども、友達や家族とのかかわりというのは、記憶を共有することで成り立っているところがあると思うので、そうしたこと、言ったことというのをボンと忘れているものですから、コミュニケーションの中で難しさを感じることがありました。」「(033) 何か老年の方がコミュニケーションを取りづらかったよね。(中略) 老年だとやっぱり認知症とかあつて、なおかつ失語とかもあつて、たぶんみんなもそうだと思うのですが、自分の思いとかをうまく伝えられない利用者さんがいっぱいいて、だから逆に、コミュニケーションのスキルというかそういうところがまだまだないなというのをすごく老年で感じたのかな。」などの発言がみられた。これらの素データより、最終ラベルの< (B001) 認知症や失語症のある人について自分がどこまでわかっているのか戸惑ったり、自分の思いを表出することができない療養者とかかわりにおいての自分のコミュニケーション技術が未熟であることがわかった。>を作成し、そこからシンボルマークの【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】を表現した。

2) 【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】

上記のシンボルマークを導き出した素データは、以下である。

「(007) Sさんが受け持っていた認知症の方が、周りの方をみて、『私もこういうようになるのね。』という話を聞いて、認知症の方は、認知力が低下して自分のことがわからないと思っていたが、(Sさんの話を聞いて) 認知症の中間の段階にいる人はものすごく苦しいんだなということをはじめて気づいたという点で学びがあった。」「(008) 周りの人たちを見て、端の方に私を連れて行って、『あの人たちちょっと頭がおかしいのよ。私もあの病気だから、あんなふうになるのかしら。すごく嫌だ。死んだ方がいいな。』と言っていることもあれば、『お参りをしなくちゃいけない。』『昨日は娘と会った。』とか無いこと、妄想を言う時もある、わかっている時とわかっていない部分、発言があった。」などの語りがみられた。これらの代表される素データより、最終ラベルの< (A002) 認知症療養者には現実には無いことや妄想を言う時があったり、わかっている時とわかっていない時もあるが、認知症があることを自覚し、不安を持ち苦しみながら生活している人もいるということがわかった。>を作成し、そこからシンボルマークの【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】を表現した。

3) 【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】

上記のシンボルマークを導き出した素データは、以下である。

「(020) そうなんだよね。入院って、退院があるからまた別の在宅に戻ったりとか、介護老人保健施設（以下「老健」とする。）に行く方もたぶんいると思いますが、成人の方でも大概の方が在宅に戻るじゃないですか。戻れるから、あんまり入院生活自体が本当に特殊なものだから。その中にボンと入るということもあまり意識はしなかったけれど、もう老健にいる方はそこで生活していて、ずっとそこにいるから、その生活がその人だから、そこの中にボンって入るというのは結構考えてみるとね。」「(023) しかも、老健の方が話し相手がいるのかな。利用者さん同士であまり話をしている人もいないんだけど、でも利用者さん同士でグループができていたりするところもあったり、あと職員さんがボンって入って、一緒に折り紙を折ったりとか、話しながらしていたりとか、そういう場面も結構あって、リズム的な刺激があるのかなというのをすごい感じました。病院だとずっと寝たままだし、ベッドだし。ベッドサイドだけがその人の居場所みたいな。確かに自分の部屋はあるけれど、その中でも自分の席がみんなの中にあったりとか。居場所がいっぱいあるというか。」「(027) スタッフさんから、本当は寝たきりだったんだよというのを聞いて、ああそうなんだって。『寝たきりでね。でも、そこまで車椅子で座れる状態までになったのはやっぱり職員さんたちがいろいろ話し合って、いろいろ工夫して1つ1つ前に進んで行ったんだよ。』みたいなことを言っていて、(中略) 病院だと、やっぱりできかねるというか。そういうのって、じっくりやっついていかないと、やっぱりむずかしい部分があるんじゃないかなというのを感じて、老健だからこそ、時間をかけてゆっくりできるのかなというふうに思ったので、何かすごいなって思いました。」などの発言がみられた。これらの代表される素データより、最終ラベルの< (B003) 老健での生活は、療養者の回復や現状の維持につながるように時間をかけてかかわっていく場であり、リズム的な刺激や話し相手、グループ、療養者の居場所がたくさんあり、その人らしく穏やかに生活ができるという点で病院生活とは異なっていることがわかった。>を作成し、そこからシンボルマークの【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】を表現した。

4) 【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】

上記のシンボルマークを導き出した素データは、以下である。

「(005) 病院の時に、お風呂に入るのが嫌だと言っていて、看護師の方が（お風呂に入るように）言ったところ、入らないと言っていたので、(本人に) 話を聞いたら、機械浴の方で、『なんか物みたいに扱われるみたいで嫌だ。』と認知症の方だったけれどちゃんと理由があっておっしゃっていたので、接し方を考えたら拒否がなくなるのかなと思った。」「(006) 積極的に関わることも大事だと思ったが、利用者さんの気持ちの上げ下げがあって、気持ちの低い時に無理というか積極的にやってもらうことも大事だが、利用者さんが自分の方からしたいと言っている時の方が積極的にやってくれるし、散歩も利用者さんが行きたいと言ったら許可をとって一緒に行ってあげるとすごく気持ちよくできた気がした。」「(012) フロアで大きい声で話をしている人に話しかけると、『身体を大事にしてね。』とか、すごい優しい言葉をかけてくれたりして、さみしかったりとかそういうことから言葉が出ているんだと思った。娘さんの名前を呼び、大きい声を出して興奮している人がいて、怖かったんだけどまたま傍にいたら私の手を握って、『聴いてね。みんな忙しくているから傍にいてくれない。』と言っていて、ただ病気があるから興奮したりすることもあるけれど、さびしいというのが前提にあって、さびしいという気持ちをわかってあげれば穏やかにいられるんだなということを感じた。」などの発言がみられた。これらの代表さ

れる素データより、最終ラベルの< (C002) 療養者とのかわりでは、相手を尊重した関係を築き、気持ちや行動の意味を理解できることにより、行動変容をもたらすことができることがわかった。>を作成し、そこからシンボルマークの【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】を表現した。

5) 【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】

上記のシンボルマークを導き出した素データは、以下である。

「(003) ケアを実施する中で、こうして欲しい、その人が足浴で足の落屑が多く、私（学生）が足浴を必要、爪を切ろうと準備した段階で、患者（療養者）さんが嫌がる、こういうことが必要と説明をする中で納得してもらって、指示に従ってもらったが、（療養者の）認知度が低い分、ケアをするのに了承をもらう、説明をして理解してもらったうえでやることが今まで実習した中で普通、理解を得たうえでやるのが普通と思っていたが、こっち（援助者側）が必要であると思ってやってあげないと、ちょっと強く推し進めてやるが必要なんだ、理解してもらうことの大変さを感じた。」「(002) 高齢者だから自尊心が強かったりしていて、排泄などで転倒がある場合は、見守っていかなければいけないが、優先度がつかなくて、カーテン越しに見守って自尊心を優先してしまうことがあったが、後で看護師さんに聞いたら、『それは危険だよ。』と言われ、そういった所の優先度が難しかった。」などの発言がみられた。これらの代表される素データより、最終ラベルの< (B007) 看護援助では、相手の自尊心を配慮しつつも安全性をふまえたり、援助側が必要であると考えることを推し進めてやることが大事であることがわかった。>を作成し、そこからシンボルマークの【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】を表現した。

6) 【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】

上記のシンボルマークを導き出した素データは、以下である。

「(016) 老健って結構長期的に入居されている方が多くて、ずっとその生活スタイルで生活しているのに、私たち（学生）が2週間ボンって行ったところで、ちょっと違うリズムにしてしまうと、その後にまた影響が出てきちゃったりするから、そうなる私たち（学生）がいる2週間もその前の生活に合わせつつもちょっと回復というかその感じが難しいかもしれないです。」「(034) やっぱり私も、生きがいの喪失というか、普段の楽しみがないみたいな、そういうのを感じられたので、いろいろ考えてやろうと思って、(中略) 元々その施設に入る前とかも、自分の趣味とかもたぶんあったと思いますが、どうしてもできない状況になってしまって、施設に入っていたりとかする人に、いろいろ考えれば何かがあるのかもしれないけれど、それを支援して本当にその人の特有のというか、個別的な生きがいを見つけさせるというか、それを援助していくというのがすごく難しいなと思いました。」「(015) 日常の看護というのは大変ですね。やっぱりどちらかというとマイナスじゃないですか。日々失っていくものが多いと感じることが多いので、毎日同じ人たちをケアしている人たちというのは、どんな気持ちなんだろうなということを考えると、例えば子供を育てるとちょっと逆。今日はできたことが、明日できなくなるというマイナスの思考に陥りやすいという点で。例えば施設の暴力があったりとか、看護の質が落ちたりとか、どうしてもそういう所が避けられないんだろうなというふうに思いました。その中でどうしたらいいかなというふうに思います。」などの発言がみられた。これらの代表される素データ

より、最終ラベルの< (C001) 老健での援助は療養者本来の生活レベルや回復、継続した個別的な援助が必要であるが、そうした日常生活の看護が非常に難しいことがわかった。>を作成し、そこからシンボルマークの【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】を表現した。

Ⅵ. 考察

本研究は、介護老人保健施設での老年看護実習において学生がどのような学びを獲得したのかについて質的統合法 (KJ 法) を用いて分析を行った。その結果、【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】、【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】、【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】、【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】、【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】、【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】の6つのシンボルマークで表現される学びが得られたことが明らかとなった。そこで、学生の実習体験に基づく学びとその構造に関するストーリーを踏まえ、老年看護の授業や実習指導における示唆に関連づけて考察を行うこととする。

1. 困難感を表出した学生の学びとその構造について

6枚の最終ラベル同士の関係性に着目し、困難感を表出した学生の学びの状況間の構造を検討した。以下に、“介護老人保健施設で困難感を表出した学生の学びの構造”の空間配置図 (図1) を示す。

学生は療養者とのかかわりにおいて、認知症がある人に対し説明しても理解してもらえないために、その人の理解度が把握できなかったり、失語症がある人の行動や思いを学生である自分がどこまでわかっているのだろうか戸惑いながら療養者にかかわっていることに気づいていた。また記憶障害のある療養者と記憶や体験の共有ができないことから援助計画の立案と実施が困難であったり、自分の思いを表出できない療養者とのコミュニケーションにおいて、対象の思いを引き出しながら理解することができないために、自分自身の対人援助技術の不足を痛感し、【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】を自覚したと思われる。

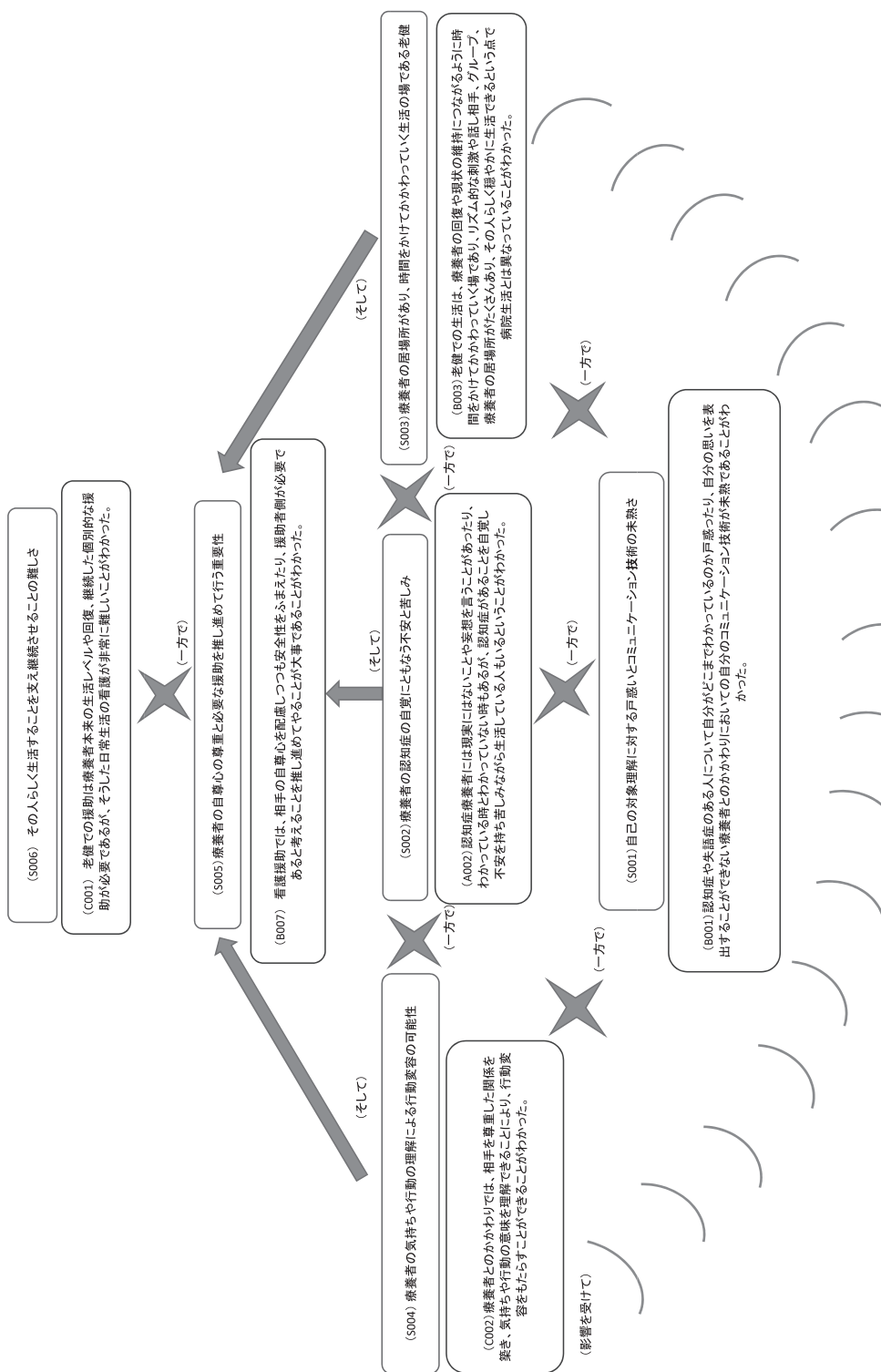
学生は、援助者として未熟な自己を知覚する一方で、療養者とのかかわりの中で認知症の療養者が現実には無いことや妄想を語ったり、わかっている時とわかっていない時もありながら、療養者自身が認知症であることを自覚し、不安や苦しみを抱きながら生活している現実を知り、【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】についての対象理解を深めることができていた。

また学生は、実習初期における対人援助技術の未熟さがありながらその一方で、老健での生活の場を療養者と共に過ごすことにより、老健が療養者の健康回復と現状維持につながるように時間をかけてかかわることができる場であることや、その人らしく穏やかに生活することができるように支える場であることなどを理解し、【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】の役割についての多様な意味づけと援助のあり方について理解を深めることができたと考える。

加えて自己の対象理解の不足や対人援助技術の未熟さがある一方で、学生は療養者とのかかわりを重ねる中で、対象の反応の違いや変化、多様性を捉えて【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】を見出すことができたと考える。

療養者の居場所となり、その人らしく穏やかに生活できる場となる老健の持つ力が波及するこ

図1. 介護老人保健施設での老年看護実習で困難感を表出した学生の学びの構造



とにより、学生は療養者を尊重した関係を築く必要性に気づき、対象の思いや行動を理解してかわり方や介入するタイミングの工夫をしながら療養者の行動変容をもたらすこと【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】について学ぶことができたと考える。

また、認知症の自覚にともなう不安と苦しみを抱えた療養者であっても、対象の行動の背景にある思いや認知症にともなう症状のあらわれについての学生の理解が深まることにより、療養者の持てる力や可能性を引き出し、【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】とQOLの向上につながることや、療養者が自分の居場所や楽しみを見つけられ、その人らしく生活できる場と老健がなりうること、つまり【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】という生活の場の持つ力や役割についても学ぶことができていたと考える。

看護援助を行う上では、療養者の自尊心を尊重し、同意を得ながら援助を実施していくことが基本的に重要なことであるが、加齢による影響や認知症にともなう療養者の身体的、心理的、社会的な特徴や医療的な側面をふまえた援助がぜひ必要であると判断（アセスメント）した場合は、看護の専門職としてその援助を推し進めて行う必要があること【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】について学ぶことができていた。

療養者が安心して、その人らしく生活できる場と老健になるために、また療養者の気持ちと行動を理解して療養者の持てる力を引き出していくためには、療養者の自尊心を尊重しつつ対象の健康回復や維持の観点から対象をホリスティックに捉えて介入（必要な援助）をしていく必要性があること【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】について学ぶことができていた。

そして、学生は老健での高齢者の生活を支えるための中心的要素として、《療養者の自尊心を尊重し、対象の気持ちや行動の理解を深めてじっくりと療養者の生活の場にかかわり、必要と判断した援助を推し進めることが重要であること》を学ぶことができていた。その一方で、療養者本来の生活レベルや回復に向けた個別的な援助が必要であり、療養者にとって居心地のよい生活の場の創造や提供をし、療養者の持てる力を引き出せるように努めるが、実習終了後の療養者の生活をふまえて継続した個別的援助を定着させていくことが難しいこと、【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】について学び、老年看護のあり方についての新たな課題を抱えているように思われた。

2. 学生の学びの獲得と教育的なかわり

学生は老年看護実習に入る前に、その前提として学内で講義や演習の形態で看護の根拠やそのあり方について学び、知識や技術を深めている。しかしながら、実際の看護学実習において、様々な対象とのかかわりや看護援助を行う機会を通じて、「自分とは何であるのか」といった同一性の獲得をするとともに自分とは異なる対象の理解をさらに深めることになり、看護援助をする上での課題がそこにあると考える。

実習初期の学生は、先行研究にもあるように^{1)・4)・5)}、対象とのコミュニケーションや関係づくりが困難であると感じており、認知症療養者に対する戸惑いや拒否された際の不安、高齢者とは何を話せばよいのかなど、様々な困難感を抱えながら実習に臨んでいることが明らかにされている。しかしながら、たとえ学生の実習体験の内容が学生自身にとって困難なことであっても、自ら体験していることを振り返り、自ら考え、自分の言葉でその体験を意味づけることが「自分と

は何であるのか」、「看護とは何か」を知る機会となり、看護援助のプロセスにおける学生の学びとなるのではないかと考える。よって、本研究でえられた【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】といった自己知覚による学びは、自分の置かれている実習状況を客観的に捉えることができていたとも考えられ、その事実を客観的に受けとめ、今後どのように学生が対象と向き合っていけばよいのかについて考える機会になると思われる。また教員は、学生の語りの中にある戸惑いや未熟さといった自己知覚の部分をマイナス要因として捉えるのではなく、自己の気づきにもとづく学生の変化や成長の機会にもなり得ると捉え、学生の体験にまつわる思いや考えをタイムリーに引き出しながら共有し、次の一歩が踏み出せるように時に見守り、時に背中を押して励ますようなかわりが必要になるのではないかと考える。

次に学生は、対象理解の不足とコミュニケーション技術の未熟さを自覚する一方で、【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】に気づいている。これは、認知症療養者との実際のかかわりを通じ、認知症の症状や障害を単に問題として捉えるのではなく、認知症の症状を自覚する対象の隠れた痛みやその痛みにもなって対象に起きていること、表れていることに関心を寄せた学生の気づきであり、机上の学習では得られない学びがそこにはあると考える。このように、学生がこれまでの実習の中で自分には見えていなかったことが見えてきたり、何かがわかることにより、対象の断片的な理解から統合された理解につながるのではないかと考えられる。高橋⁶⁾は、ケアの初心者が認知症高齢者について他者に語ることにより、高齢者像が統合され、高齢者理解が発展することを述べている。よって、このような学生の気づきを引き出して自信を持たせるためには、教員が日々の学生の実習記録や発言内容に関心を寄せるとともに、実際の援助場面やカンファレンスの機会、直接学生と話をする機会などを捉えて、学生が療養者のことでわかったことは何であるのか、わかっていないことは何だろうかと振り返りをさせてみるのが対象理解を深めるためのひとつの手がかりになるのではないかと考える。

さらに、学生は療養者とのかかわりを通じ対象理解の手がかりが増すにつれて、対象の意向や思いと行動の変化の関係性に着目するようになり、自分のかかわりによる対象の反応の変化（違い）を捉えて【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】を見出すことができたのではないかと考える。このような学生の気づきについては、千葉³⁾の研究報告の中で、学生が高齢者の思いを推察し、高齢者の生活のありようの理解が深まることにより、提供するケアの質によって高齢者の能力が影響を受けること、“ケアの高齢者への影響の気づき”を指摘している。よって、実習場面での学生のかかわりと療養者の反応についての再構成を試み、そのかかわりがどのような意味を持つのかといった、経験の意味づけを学生にさせることにより、さらなる対象理解を深める機会になるのではないかと考える。

【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】といった学びは、加齢にともなう機能低下や疾患にともなう障害、家族介護者の状況など、様々な背景から生活の場を変えせざるを得なかった療養者にとっての新たな生活の場となる老健（環境）が持つ多様な力の意味とその重要性についての気づきであると考え。加えて、援助者である学生自身が人的環境要因のひとつになり、療養者とのかかわりを通じて様々な影響を及ぼす存在になり得ることを自覚した学びであるとも考える。学生の語りの中に、「(023) 老健は目的が違うからね。(中略) 老健はその人がいかにその人らしくみたい感じで、穏やかに生活が続けられるみたいな、(後略)。」といった発言があり、療養者ひとりひとりの暮らしを尊重し、できるだけ自立した生活が持続できるようにかかわる必要性についても学生は学んでいると考える。

学生は日々の看護実習をする中で、療養者の意向を第一に尊重して考えることを常としている。そして、療養者の現状の機能や健康を維持しながらできるだけ自立した安全で豊かな生活を過ごしてもらうことが必要であるとも考えており、そのためには看護の専門職として【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】があることを学んでいる。学生が療養者とのかわりにおいて必要な援助を推し進めることにより、時に療養者の理解が得られなかったり、そのことが要因となって学生対療養者との信頼関係が揺らいでしまうような状況になりうることも予測される。よって、教員や臨床指導者は日頃から療養者の大事にしているものや意向を把握するとともに、学生が療養者のために何を目的にどのようなことをしたいと考えているのか、その根拠は何かについても理解し、療養者にとって必要な援助とは何かについてともに考えることが必要ではないかと思われる。

【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】といった学びは、療養者を単に身体的・心理的・社会的な存在として断片的に捉えるのではなく、一人の生活者として包括的に理解し、各々の個性を尊重しながら継続した生活を支えることの難しさを学んでいると考える。また、そこには今現在から未来（将来）に向かって生活し続ける存在である対象の QOL と看護を追求する目標志向性と課題があり、学びの深まりと発展があるのではないかと考える。実習終盤の学生との会話の中で、「療養者のことが分かったと思う頃に実習が終わってしまうんですね。」といった言葉がよく聞かれる。こうした学生の発言から、学生は対象の理解を深めながらも、それに見合った個別的で継続性のある看護の実践をやり遂げることができたといった手ごたえが十分に感じられていないのではないかと思うことがある。よって、学生が療養者とのかわりの中でできている看護の意味づけを行ない、自己課題が何であり、それを克服するためにはどのようにすればよいのかについても考えさせ、学びや看護観を深めることができるように支える必要があるのではないかと考える。

Ⅶ. 本研究の限界

本研究は、当大学の老年看護実習を終了して研究協力の得られた 20 名余りの学生に対して FGI を行ったものであり、インタビューで得られた素データも少ないことから、老年看護実習における学生の学びとして一般化することは難しいと考える。また、FGI では老年看護実習における学生の困難感を明らかにすることを第 1 の目的として行い、第 2 のリサーチクエスションとして「老年看護実習での学びとは何か？」について問いているため、介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難さの体験のもと導き出された学びであると言える。よって、老年看護実習における学生の学びを明らかにして一般化するためには、FGI の方法の検討と対象者数や抽出データを増やす必要性があると考えられる。

Ⅷ. 結論

本研究では、介護老人保健施設での老年看護実習において困難感を表出した学生の実習における学びについて明らかにすることを目的に、FGI の内容を質的統合法（KJ 法）を用いて分析した。その結果、以下の内容が示された。

1. 老年看護実習における学生の学びは、【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】、【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】、【療養者の居場所があ

り、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】、【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】、【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行う重要性】、【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】の6つのシンボルマークで表現された。

2. 学生は【自己の対象理解に対する戸惑いとコミュニケーション技術の未熟さ】を抱き、困難感を出しながらも、看護の対象である療養者とのかかわりを通して、【療養者の認知症の自覚にともなう不安と苦しみ】を知り得ることができていた。また【療養者の気持ちや行動の理解による行動変容の可能性】や【療養者の居場所があり、時間をかけてかかわっていく生活の場である老健】の役割についての学びを得て、専門職である看護師として【療養者の自尊心の尊重と必要な援助を推し進めて行なう重要性】に気づき、療養者が【その人らしく生活することを支え継続させることの難しさ】を学ぶことができていた。

謝辞

本研究を行うにあたり、貴重な実習体験を語ってくださった学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

1. 石垣範子 深江久代 今福恵子 宮前典子 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について 静岡県立大学短期大学部研究紀要 第26号 p43 - 55 2012
2. 杉野朋子 丹羽さよ子 「老年看護学実習」における学びの分析 - 学生の実習レポートの分析より - 鹿児島大学医学部保健学科紀要 第21号 p13 - 19 2011
3. 千葉真弓 原田美香 細田江美 楠本祐子 渡辺みどり 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び 長野県看護大学紀要 第10号 p21 - 32 2008
4. 榎本明子 須田厚子 田邊美津子 老年看護学実習での高齢者とのコミュニケーションにおける教育課題 川崎医療短期大学紀要 第27号 p19 - 24 2007
5. 高橋順子 林裕子 老年看護学実習の初期における学生の困難 疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点 看護総合科学研究会誌 Vol.11 No2. p15 - 23 2009
6. 正木治恵 真田弘美 老年看護学概論 「老いを生きる」を支えることとは 南江堂 p155 2011

参考文献

1. 山浦晴男 質的統合法入門 考え方と手順 医学書院 2012
2. 久代和加子 南川雅子 亀井智子 老人保健施設で行う老年看護学実習における学びと課題 聖路加看護大学紀要 No27 p52 - 58 2001
3. 千葉京子 介護老人保健施設実習における認知症高齢者ケアの学び 日本赤十字武蔵野大学短期大学紀要 第18号 p43 - 49 2005
4. 木下香織 古城幸子 馬本智恵 認知症対応型グループホームでの老年看護実習における学生の学び - 短期大学教育での実習目標への帰納的な分析から 新見公立大学紀要 第33巻 p11 - 19 2012
5. 屋宜譜美子 目黒悟 教える人としての私を育てる 看護教員と臨地実習指導者 医学書院 2009

6. Erikson, E. H. 著 仁科弥生訳 幼児期と社会 I みすず書房 1977

キーワード：老年看護 介護老人保健施設 学生の学び

(2013 年 12 月 24 日 受理)